

黒孔雀は 囚 われる。

SIDE-M

純反良幸
伊祖子久美

R-18





黒^{くろ}孔^く雀^{じゃく}は
囚^{とら}わ
れる。
S
I
D
E
・
M

原作
作画
・
伊純
祖友
子良
久幸
美



この本は「成人向け」です。
購入者が18歳以上であるという申告の元に頒布しております。
よって18歳未満の購入、閲覧を禁止します。

内容はすべてフィクションであり、実在のいかなる人物、団体とも
関係ありません。



あれ？

バァ

おおがき
大垣さん
ずっと後ろ
走ってたの？

ガッ

黒孔雀は囚われる。

SIDE_M



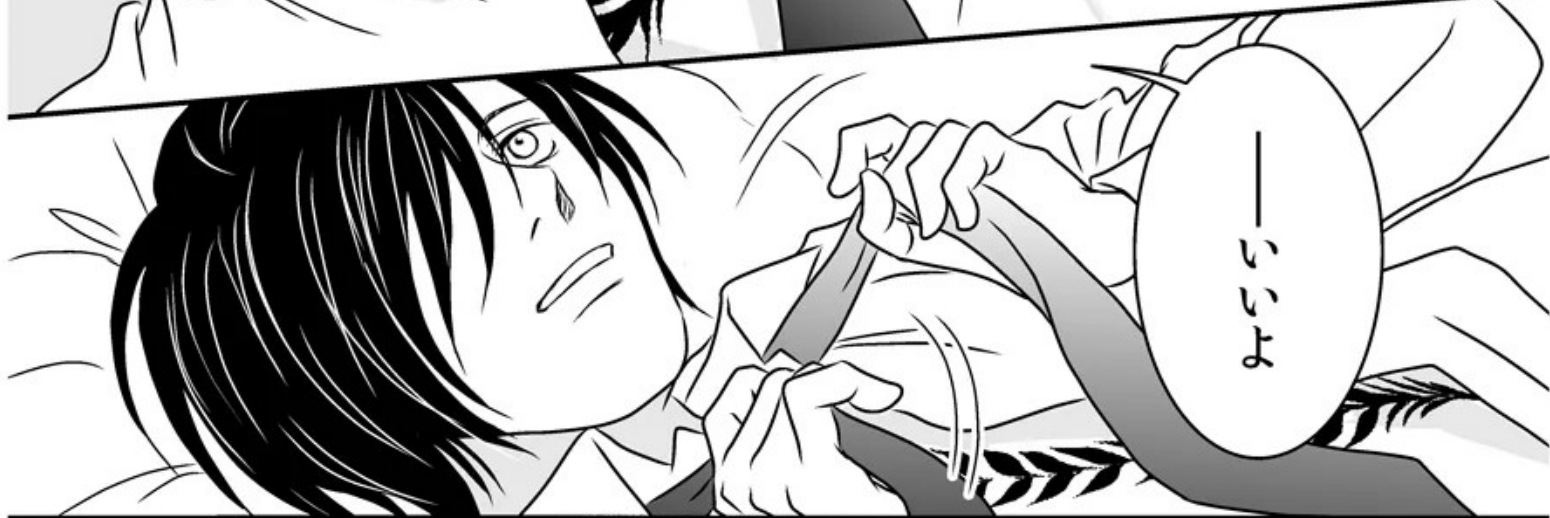






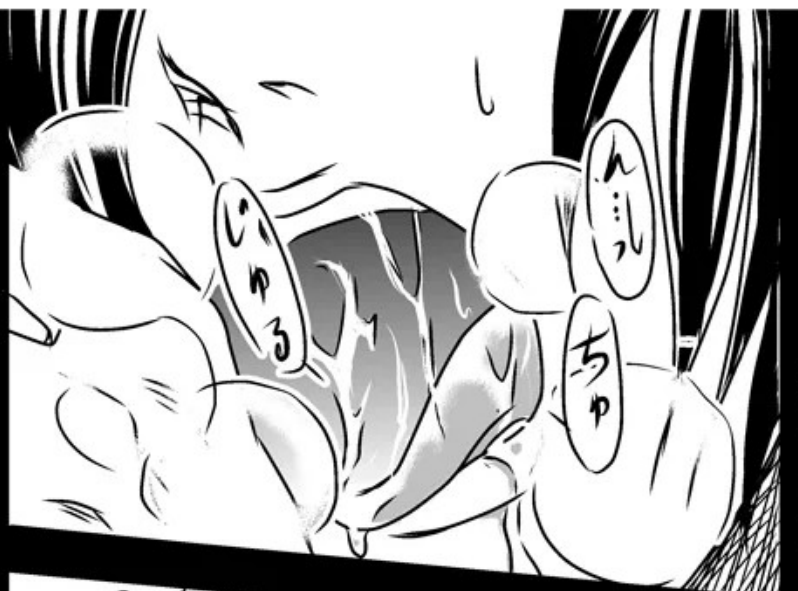














それ……
無理……っ

濡れて
ないから
……っ



もつと
腰あげろ

もつと



……先輩

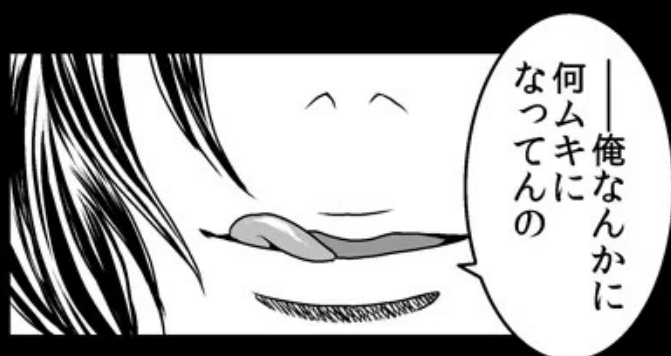
痛くして
痛いのがいい

これよし
之祝……



















これで安心して
出張行けるでしょ？

早く帰って来てよ？

もしあんたに
何かあったら
俺は凄く困る



貞操帯は新品だけど
ピアスは他の奴も
触ったんだろ



なんで？

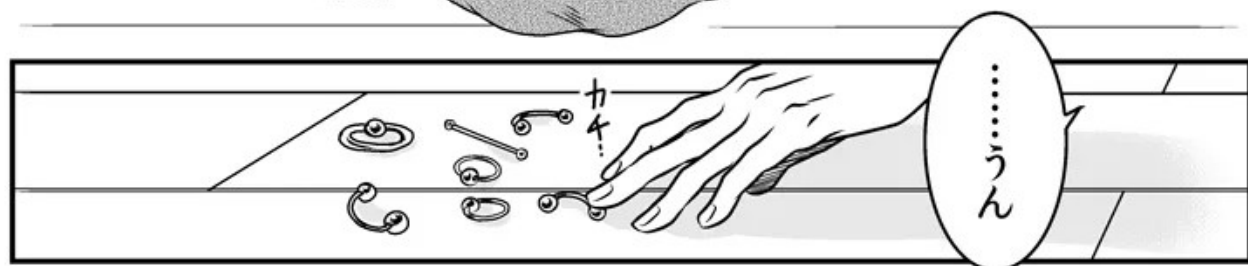


泉——ピアス
外していいか？

全部



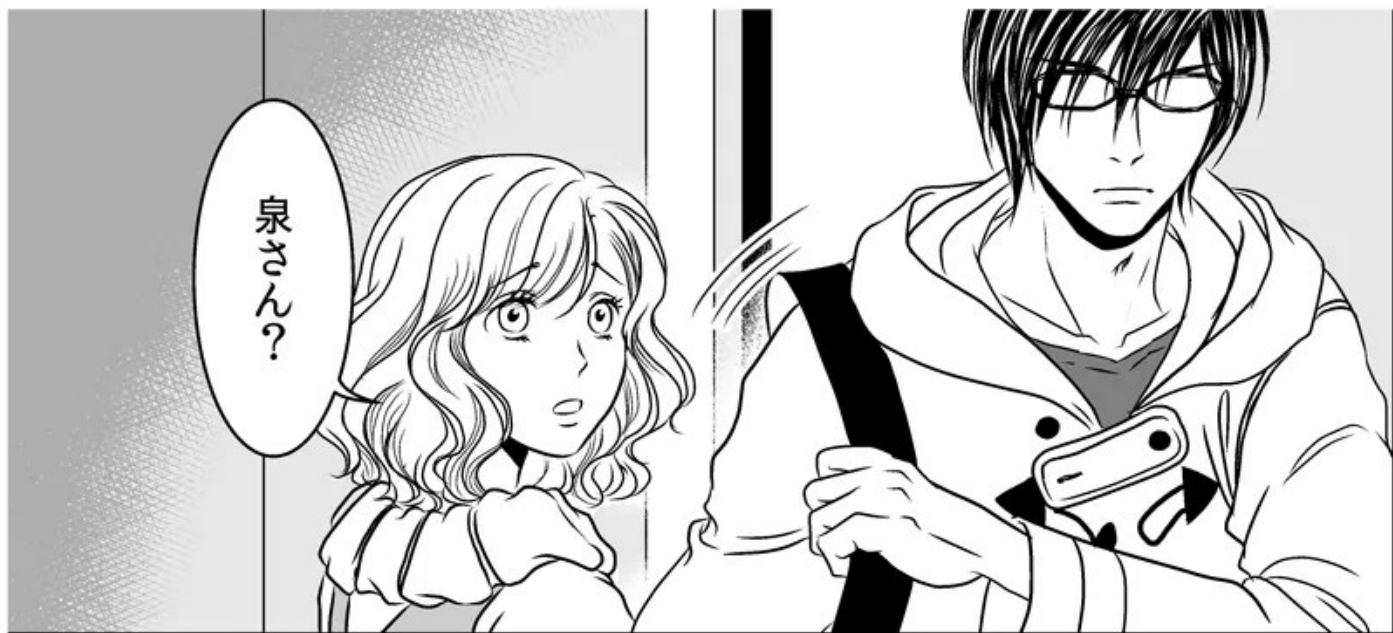
——いいよ
好きにして



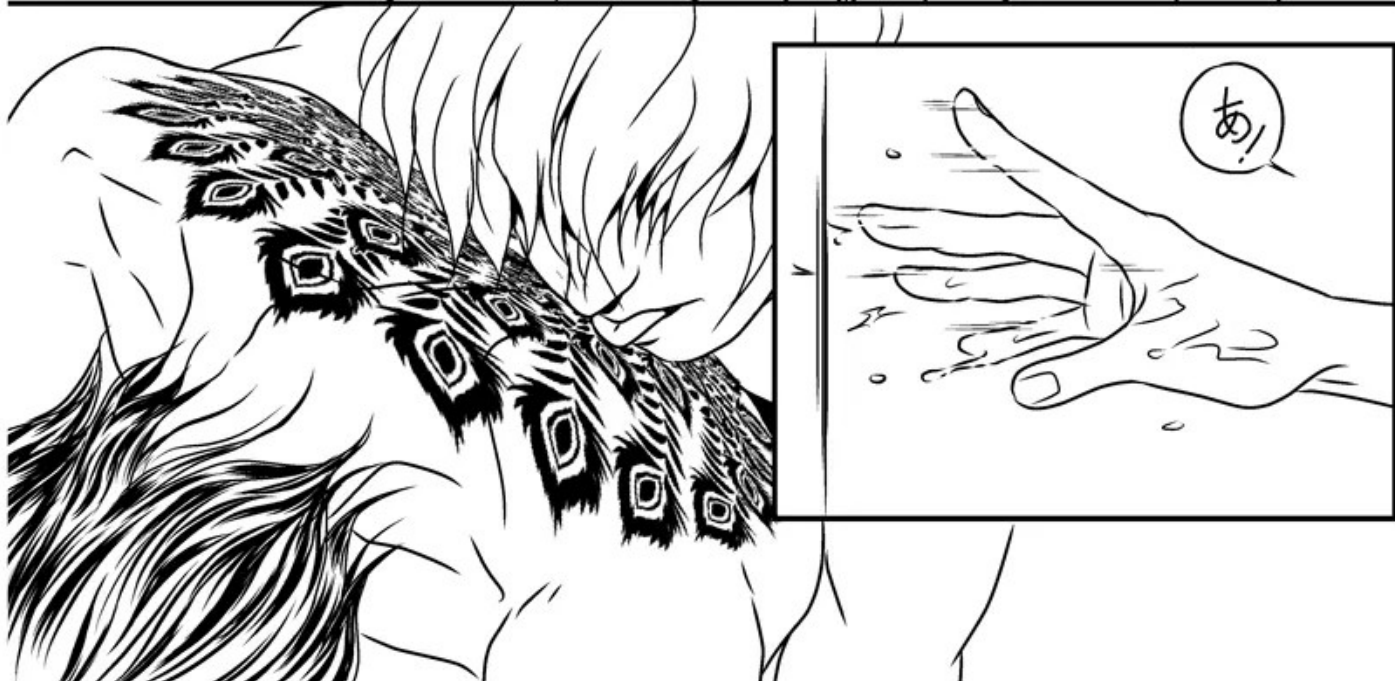














噛んで……
抓って……



あ……之祝



もっと痛くして



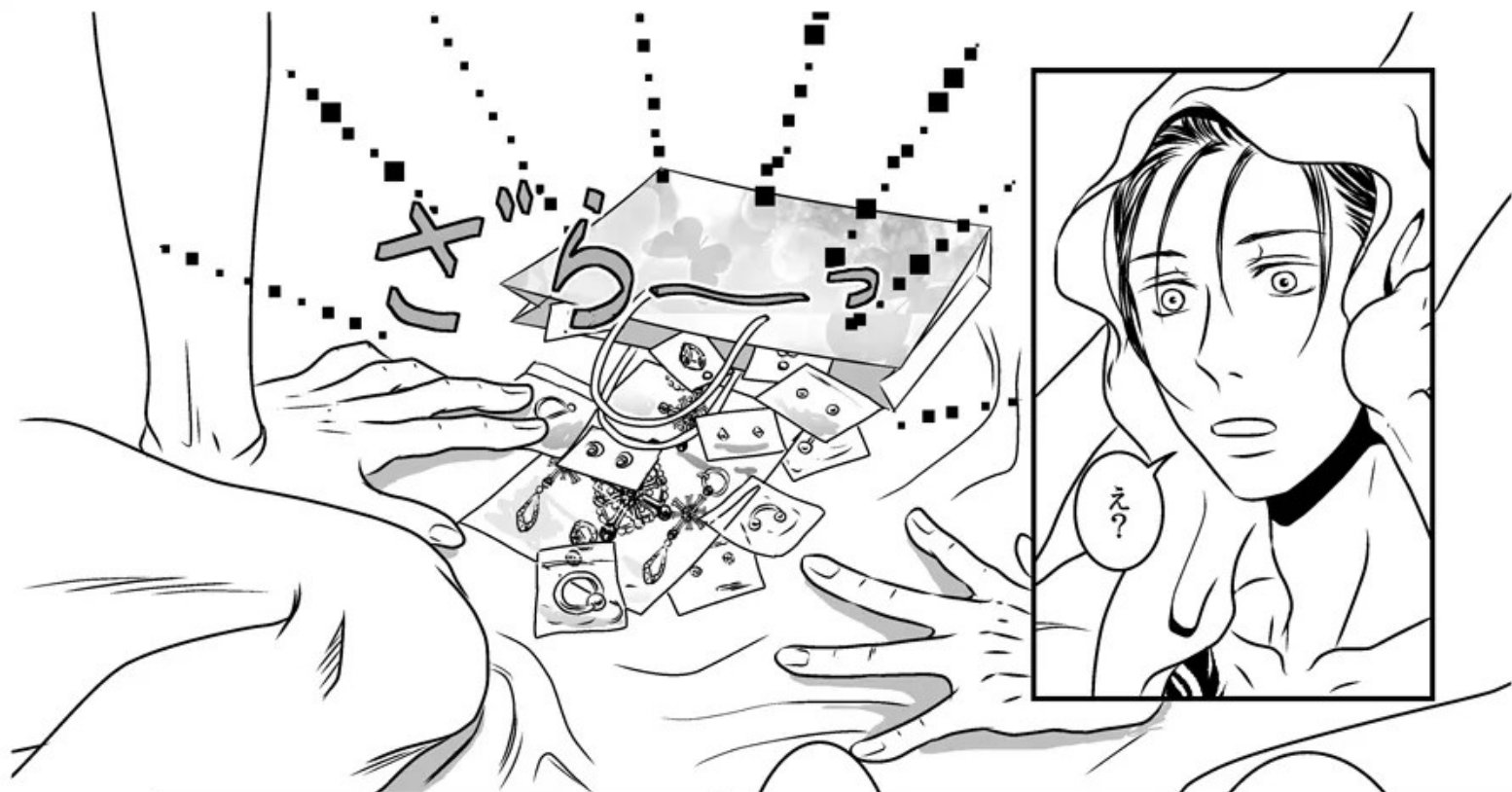
もっと痛くして



——もっと



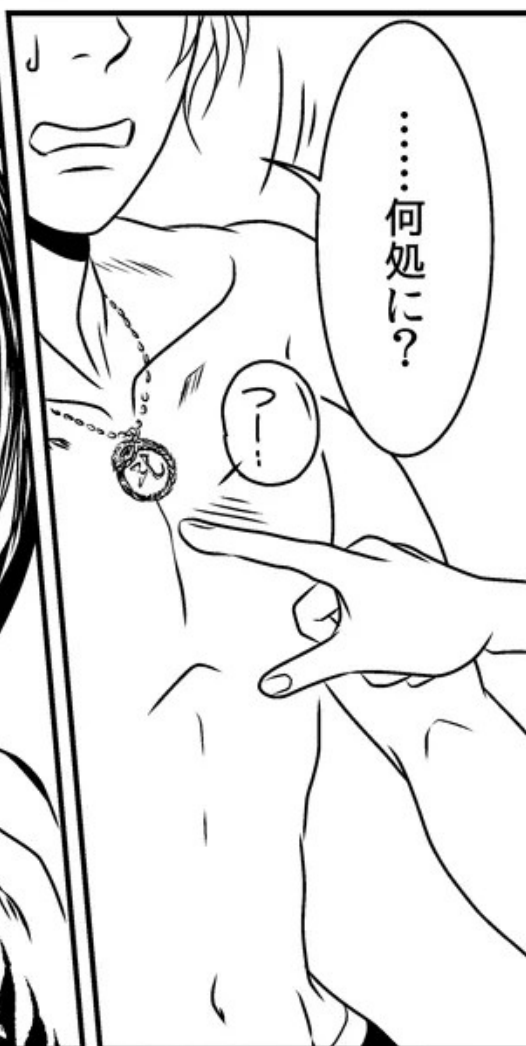
—
土産





一個だけ
お返しさせて







END



梶は黙秘する

伊祖子久美

俺の客のひとりが死んだ。

——よくある、とまでは言わないが、初めてのことでない。

誰かが『梶木堂の彫り物には傷がつく』と言い出した。

梶木堂というのは、先代から引き継いでもうひとつの

アーティストネーム

屋号だ。普段はスタジオの名でもある『K』を名乗って

いるが、俺は、師匠のジंकスも受け継いだのかもしれない。

タトゥー

俺の作品を刻んだ客が殺されたせいで、毎日、刑事が通っ

て来るようになった。

もう話す情報はないと言うのに、毎日。

鬱陶しい、来るなと言うと「あなたが心配です」なんてことを言う。

最初のうちは、顔を見て無事を確認し、変わったことはなかったかと尋ね、何もない、と答えると帰って行った。

ある日、ドアに鍵をかけずにいると、その刑事は「在宅中でも戸締りはして下さい。不用心です」と言って眉を顰めた。お前が毎日訪ねて来るんでなきゃそうしてるんだよ、と言いたかったがやめておいた。

殺人事件に巻き込まれた——或いはそう見做されただけでも面倒なのに、この刑事は更に面倒だった。

外出をするなどと言わないが最小限に。勿論、遠出は避けろ、『殺す』と書いた脅迫状が届いたのだから夜に飲み歩くなど論外だと言う。

何の権利があつて犯罪者でもない俺の行動を制限するんだ？

それは命令か？ と尋ねると、命令ではなくお願いです、と言った。

そして、刑事はこっちが気恥ずかしくなるほど真摯に俺を見上げた。

「あなたが心配なんです」

その日もインターフォンが鳴った。

鍵とチェーンを外してドアを開ける。立っていたのは顔馴染みになった刑事ではなかった。

「こんばんは」

そいつは、腐れ縁の悪友の恋人だった。

以前、泉とこの男と俺の三人で飲んで、終電がなくなり、此処で飲み直したことがあったが、こいつが一人で訪ねて来

るのは初めてのことだった。

「——どうした？」

そう尋ねると、大垣は俺に細長い紙袋を差し出した。

中身は焼酎。決して安物ではないが、貰う方が気を遣うほど高価でもない。最初は青臭いガキだと思ったが、営業職だけあって年齢の割に行き届いた男のようだ。

時折、刑事が「差し入れです」と言っけて持って来る甘いものよりずっと気が利いている。

別に甘いものが嫌いな訳ではないが、俺への手土産に甘いものを選ぶ人間は珍しいというだけだ。——意外に思われることも多いが甘いものも、それなりに好きだ。

俺の嗜好はどうでもいい。泉の恋人が、俺のところに、ただ顔を見たり見せたりするために来る訳はない。

「大変だったそうですね」

客用のソファを奨めると、大垣は言った。

「別に大変じゃねえよ。俺が殺された訳でも殺した訳でもねえ」

ただ、刑事が面倒くさいだけだ。監視だか護衛だか知らないが、いずれにしろ目障りだ。

コーヒーを入れて、どうした、何かあったかと尋ねると、大垣は言った。

「鐘淵さんも、ちんこにピアスしてるんですか？」

噓せて思い切りコーヒーを噴いた。いきなり何を言い出すんだ、こいつは。

俺は酷く咳き込み、暫くまともに呼吸が出来なかった。

「大丈夫ですか？」

大垣は、縁をきつちり揃えて折り畳んだハンカチを俺に差し出した。コーヒーで汚すのが申し訳ないほど真っ白だったので断って、コーヒーまみれになったスウェットシャツを脱いで顔と髪を拭いた。

「凄いですね、それ」

俺の上半身のタトゥーを見た大垣が目を瞠った。

大垣に、ちよつと待ってろと言いついて寝室に着替えに行つた。それでもまだ自分がインスタントコーヒー臭いような気がする。

ドアを隔てたスタジオに戻り、話の続きを聞くことにした。無礼なまでに唐突な質問だったが、とりあえず、何故そんなことを尋ねたのか解らないまま帰すと気になって眠れないだろう。

「泉が、俺にもボディピアスしろって言ってます」

俺のスタジオはタトゥーがメインだが、ボディピアスもやっていることはやっているし、ピアスの販売もしている。

「やって欲しい客がいれば一応やるが——お前は断る」

こいつの服を脱がせて、込み入ったところにピアスなんかして泉に文句を言われるのは御免だ。

「あそこに真珠とか入れる人もいるらしいけど、ピアスでも気持ちよくさせられるんですか？」

用心していたので、今度は噴かずに済んだ。

そんなことは泉に訊け！　と言いつたが、それもヤバそうだ。奴が己の経験を踏まえて忌憚なくそこら辺を語ったら、こいつとの間に罅が入るかもしれない。

手土産のセンスで見直しかけたのに、こいつはやっぱり青臭いガキだ。

いや、違うか。子供というより、ノンケなのだろう。

生粋ゲイの泉とつきあっていながら、まだ感覚が完全にヘテロのままだから、俺のところにひとり来て、いきなりそんなところにピアスを入れてるのかとか、それで相手を気持ちよくさせられるかなんてことを訊けるのだろう。

ああ！　本当に、ノンケって奴は。

「孔あけるとき、やっぱり痛いんですか？」

俺は入れてないと言ったのに、更に大垣は尋ねて来た。

「いや、泉が気持ちよくなるなら、ちよつとくらい我慢するけど、なるべく痛くない場所とか——」

ああ、もう、何処から突っ込むべきか。

どう説明すれば解るんだろう、と、少し考えた。が、なんと俺がそんなめんどくさい教育をしてやらなきゃいけないんだと思ひ直した。

そういうことは、つきあっている泉が躡けるべきだろう。

「帰れ」

俺は入り口のドアを指差した。

「えっ……？　ああ、すみません、急に来て——忙しかったですか？」

スタジオは休業を余儀なくされているから忙しくはない。

「悪いが、そろそろ客が来る」

「あ、じゃあ、また日を改めて」

厳密には客じゃないが、毎日通って来るめんどくさい刑事もたまには役に立つ。

そして、泉は、ああまで挑発されても大垣に手を出さなかった俺の理性に感謝すべきだ。

またインターフォンが鳴った。

今度こそ、刑事だった。

「こんばんは。何か変わったことはありませんでしたか？」
眦の切れ上がった刑事が俺を見つめた。

「別に何もねえよ」

本当に何もない。事件には全く無関係な客だ。何も疾しくはない。

しかし、俺は、めんどくさい刑事に見咎められる前に大垣に出したカップを片づけた。

「俺なんか何ムキになっ
てんの知らないよ？
どうなっても」



黒孔雀は教育する。

伊祖子久美

大垣は、自分が嫉妬深いと思う。

元々は、それほどではなかったはずだ。少なくとも、泉以前につきあった数人の女性相手にはそうではなかったと思っっている。

これは、泉とつきあうようになってから——いや、泉と出逢ってからかもしれない。

春はまだ浅く寒い夜、泉が長いつきあいだという彫師の鐘淵と抱き合っているのを見てしまった。

激昂して詰問してしまった。そして、理由を聞いてこれは許容しなければならぬい事情だと思った。

数日前、河原で発見された首のない死体にタトゥーがあった。それはどうやら鐘淵が彫ったものであるかと思われたので、警察の遺体安置室で確認させられたのだという。そして、死体の身体にあったのは、確かに鐘淵の『作品』だったらしい。

あいつ、あれで優しいから、と泉は言った。

それは感じていた。

長身で威圧感のある容姿のせいというだけではなく、鐘淵には人に一目置かせるような雰囲気がある。そんな鐘淵が、大垣の誕生日にプレゼントをくれた。泉の孔雀のタトゥーに因んだ孔雀明王のペンダント。何かをくれたからいい人、というのは短絡的に過ぎるが、少なくとも、気遣ってくれる人には違いない。

だから、衝撃や心痛も理解出来る——しなければならぬと思ったのに、抑え切れなかった。

誰もが辛いことがあったときには、身近な人の慰めを必要とする。

自分に友人がいるように、泉にも友人はいて当然だ。

「俺のことも心配だったみたいだよ」

それも友達なら当然だ。

余計な御世話だ、俺が、俺だけがひとりで泉を守るから一切構うな！ 触らないでくれ！ と、口にするほど子供ではないつもりだ。

けれど、ただの一時も心の中でそんな風に思わずにいられるほど大人でもない。気がついたら、酷いことをしていた。

最初の頃は泉を脅迫した。やつと穏やかな関係を築けるようになったと思ったから——あんなことを。

あれは——脅迫より酷い。

しかし、泉は「Mには御褒美」と言って笑った。

泉は、様々なことをしてくれる。それはいつもさりげなく。笑わせてくれ、夢中にさせてくれ——子供より酷い駄々を捏ねて手荒く抱いても許してくれた。

大垣は、いつも、泉がくれるものに対して、自分が返しているものは質も量も足りないと思っっている。

泉が望むことは何でもしたい。

泉は、鐘淵のことを『数少ない友達』だと言った。その関係を断ち切ることは泉が望むはずはないから我慢しよう。勿論、それが『友情』に留まる限りに於いてだが。

泉は「あいつ、今、辛気臭い」と言っていた。泉が電話で、三人で飲むかと誘ったが「この件が一段落するまでは無理」という返事だったらしい。

どういう訳か、鐘淵の自宅兼スタジオが家宅捜索を受けたのだという。

「それどういうこと？ なんの容疑で？ お前、殺人容疑かかっているの？ 別の部署がつて……何それ？ あからさまに嫌がらせじゃないか。なんでガサ入ったそのときに弁護士呼ばないの？ ——知り合いがいるとかいないとか、そういう問題じ

ガサ入れ
やない。次から家宅搜索とか逮捕されたら俺に電話して。俺の法曹関係の知り合い紹介するから」

その電話の後、泉が法学部卒だと初めて知った。

泉が鐘淵のために力になろうとしているのを見て、また嫉妬した。だめだ。これはだめだ。

泉に「俺と鐘淵さん、どっちが大事だ？」と尋ねたい衝動が湧き上がった。泉はきつと「内心がどうであろうと」「あんた」と答えてくれる。そうしたら、自分はその乗じて「じゃあ、鐘淵さんと二人では逢わないでくれ」などと言ってしまいかもしれない。

泉は、眉を曇めるだろう——いや、それならまだいい。「いいよ、そうする」と笑って頷いて、自分の知らない場所で逢うようになるかもしれない。その方が嫌だ。

信頼は、人間関係の根幹だ。

泉を信じなければ。

そして、鐘淵も、長いつきあいの友人である泉の恋人になった自分を友人扱いしてくれようとしている。

それなら、自分も友人として接するべきだろうと思う。

ついでに相談したいこともあるし。

大垣は、鐘淵のスタジオを訪ねることにした。

誕生日プレゼントの返礼も兼ねて、焼酎を買った。鐘淵はうわびみだから、手土産として大きく外してはいないだろう。

インターフォンを鳴らすと、鐘淵が出て来て、大垣を見下ろして一瞬、目を見開いた。

「こんばんは」

挨拶すると、鐘淵は「おう」と答え、何処か戸惑ったような様子だったがスタジ

オに招き入れてくれた。

焼酎を差し出すと「おっ！」と言って笑った。

「ペンダントの御礼です」

「あんなものに気を遣わなくていいのに」

鐘淵は、早速開けたところだが仕事があるから、と言ってコーヒーを入れている、大垣にカップを差し出した。

「——大変だったそうですね」

「別に大変じゃねえよ。俺が殺された訳でも殺した訳でもねえ」

それはそうだろう。どういう訳か家宅搜索などされたというが、この人がやったはずはない、と大垣も思う。

「——一人で来るって珍しいな。何かあったのか？」

「鐘淵さんも、——にピアスしてるんですか？」

そう尋ねると、鐘淵は熱いコーヒーを思い切り噴いた。

「大丈夫ですか？」

ハンカチを差し出したが手を振って断られた。茶色い飛沫で汚れたスウェットを脱いでそれで口許を覆いながら激しく咳き込んでいる。

「凄いですね、それ」

鐘淵の上半身には鮮やかなタトゥーが彫られている。大垣はこれまで、鐘淵のタトゥーは右手の甲に彫られたものしか見たことがなかった。

呼吸が整った後、鐘淵は「ちよつと待ってろ」と言い、隣の部屋で着替えて戻って来た。

「いきなり何を言い出すんだ、お前」

鐘淵は、目を眇めて言った。

「泉が俺にもボディピアスしろって言うんです。此処でもやってくれるんですよね？」

「やって欲しい客がいれば一応やるが——お前は断る」

鐘淵は、忌まわしいものでも見るかのように大垣を見た。泉に対してよく向ける表情だ。

泉が、他の男も触れたピアスを着けているのが嫌で、今着けているものは全部捨ててくれと頼んだら、泉は鷹揚に笑ってその通りにしてくれた。そして、新しいのを買ってプレゼントした。

そのとき、「その代わり、一個だけ俺からお返しにプレゼントさせて」と言っていた。断れるはずがない。例え交換条件がなくても、泉が望むことは何でも聞き入れたいと思う。

「あそこに真珠とか入れる人もいるらしいけど、ピアスでも気持ちよくさせられるんですか？」

——実は、一度だけ、成り行きで下になったことがある。そのとき、泉は言った。

『俺のピアス、後ろから挿れると先輩のイイところに当たると思うよ？』

泉のものを受け入れたのはそのときが初めてで、それ以来ない。勿論、泉以外の男のものは知らないから、ピアスを入れている場合と、そうでない場合の比較もしようがない。

しかし、自分のものにピアスをしていないために、過去の男と比較して物足りないというのなら、今すぐにでも着けたいと思う。

「あそこにピアスの孔あけるときって、やっぱ痛いんですか？ いや、泉が気持ちよくなるならちよつとくらい我慢するけど、なるべく痛くない場所とか——」

そして、どの辺りに装着すれば相手が気持ちいいのだろうか、と更に相談しようとする。鐘淵は頭を抱えて深いためいきをついた。

「あの……？」

鐘淵は顔を上げ、決然として入り口のドアを指差した。

「帰れ」

唐突にそう言われて驚いたが、鐘淵は続けて言った。

「悪いが、そろそろ客が来る」

大垣は慌てて立ち上がった。

「ああ、すみません、忙しかったですか？ じゃあ、また日を改めて」

ドアを閉める間際、「改めんな」というためいき混じりの呟きが聞こえた気がした。

その日、大垣の部屋に泉が来たので、鐘淵のスタジオを訪ねたと言っと、泉は無表情になった。

問われるままに、どんな会話をしたのかを説明すると、泉は目を細め、珍しいほど不機嫌を露にした。

「あんた、馬鹿？」

何を怒っているのか解らなかった。

「自分はあんなに妬いというて、何やってんの？」

「……は？」

「信じられない」

泉は怒っても綺麗だ——などと思ってしまった。

「鐘淵がゲイだって知らない訳はないよね？ 言わなくたって解るよね？」

勿論、そうだろう。ゲイバーの常連でもあるし、泉と長い付き合いだというなら、わざわざ尋ねるまでもない。

「あんたさ、女から『彼氏が乳首とかあそこにピアスしろって言うんです。変態でしょ？ でもちよつと興味あるし……痛いのかなあ？』って相談されたら、どう思う？」

大垣は、思わず、「あ」と声をあげた。

「俺、凄えセクハラした……？ もしかして、怒ってるかな」

急に帰れと言われたのは、そういうことだったのだろうか。

狼狽えそうになった大垣に、泉は「導っ！」と言った。

「え？」

「逆、あんたの好みの巨乳で気の強い秘書とかキャビンアテンダントとかに『ボディピースしてると、Hのとき気持ちいいっていうけど、どうなのかなあ？』って言われて、悪い気する？」

「……え？」

泉が話しているのは日本語のはずなのに、一瞬、意味が把握できなかった。

「……あのね、あんた、俺と鐘淵のこと気にしてたけど、俺より、あんたの方がよっぽどあいつの好みなんだよ」

「え……？」

「信じられない！」

大垣は泉の言うことの方が信じられなかった。

「鐘淵さんの好み？ 誰が？ 俺が！」

完全に想定外だ。考えたこともなかった。

泉は頭を抱えてためいきをついた。

「で？ そんなこと言って、あいつから何もされなかったの？」

「されてない！ 全然、何も！」

大垣は首を振った。

「あいつ、手は速いし据え膳は手掴みで呑み込むタイプなんだけどね」

「ほんとに何も無いって！」

「だよー！ 何かされてたら、そんな話、俺に出来る訳ないもんね。あー、あいつも焼きが回ったのかなあ？ 枯れるには早いと思うけど」

泉は顔を上げ、身を反らせるようにして大垣を見下ろした。その視線を受けて、自然と猫背になってしまう。

「ほんと、ありえない！ 馬鹿？」

「だって、そんなこと全く、全然、欠片も、一回も、考えたことねえし！」

「俺、今日は帰る」

大垣は立ち上がった泉の手を掴んだ。

「待って！ 泉！」

泉は振り払いはしなかったが、大垣に指を掴まれたまま玄関に向かおうとした。

「泉！ 悪かったから！ ほんとに！」

泉は何度も名前を呼ばれて漸く振り返った。

「帰るなよ」

泉は膝立ちの大垣を見下ろしている。

「なんでもするから！ ピースでも、タトゥーでも！」

泉はタトゥーと聞いて更に不機嫌な顔になった。

「冗談じゃない。あいつにあんたの裸なんか見せるもんか」

そう言った後、泉は、慈愛さえ感じさせる優しい笑みを浮かべた。

「なんでもするって、今、言ったよね？」

一瞬、背筋がぞつとしたが、頷くしかなかった。

泉の視線の先にはベッドがあり、その下には『玩具箱』がある。

泉に御機嫌を直して貰うのには苦労した。

次の朝、寝不足と消耗のために会社に休むと電話を入れたくなかったが、泉が枕に顔を埋める大垣の耳許で囁いた。

「ほら、もう起きないよ。遅刻するよ」

週末以外で、泉が大垣の部屋に泊まったのは、その日が最初だった。

黒孔雀シリーズのご案内

☆は紙の本あり ★はpixiv、パブーにて読めます。
○はpixivに試し読みあり。

「黒孔雀は晒う。」（18禁・コミック・有料）☆☆○
脅迫から始まった身体の関係。

「黒孔雀は囚われる。SIDE-S」（18禁・コミック・有料）☆☆○
黒孔雀シリーズ2作目。
恋人同士になった二人。

「君の好きなこと」（18禁・小説・有料）☆☆
註：リバあり。

「君の好きなところ」（18禁・小説・有料）☆☆

「君と好きなこと」（18禁・小説・有料）☆☆

君を見る―染井吉野（全年齢・小説・無料）★

黒孔雀は知っている。（全年齢・小説・無料）★

DAY OFF （全年齢・小説・無料）★

番外編「そんな関係じゃねえだろ」（全年齢・小説・無料）★
梟シリーズの鐘淵と泉の馴れ初めと友情。

梟シリーズのご案内

黒孔雀シリーズの姉妹……いや、兄弟編で梟のタトゥーを彫った彫師・鐘淵と刑事・来栖のお話です。

「梟と獵犬」（18禁・コミック・有料）☆☆○
職務質問の際、失態を演じてしまった制服警官の来栖。
数年後、刑事となった彼は彫師・鐘淵の客が殺害された事件を追うことになる。

「十日後の梟と獵犬」（全年齢・小説・無料）★
本編ネタバレを僅かに含みます。

「接吻～キス～」（18禁・小説・無料）★
本編ネタバレを僅かに含みます。

「君と見る一枝垂桜」（18禁・小説・無料）★

「雨」（全年齢・小説・無料）★

紙の本は通販でもお求めになれます。
チャレマ <http://www.chalema.com/book/bullet2han/>

DL販売はこちら

DLsite.com
http://www.dlsite.com/girls/circle/profile/=maker_id/RG26131.html

パブー

コミック（純友ページ）
<http://p.booklog.jp/users/su-min55>

小説（伊祖子ページ）
<http://p.booklog.jp/users/iso5kumi>

pixiv それぞれのペンネームでご検索ください。



黒孔雀は囚われる。 SIDE-M

発行:2014年08月24日

作画:純友良幸
原作:伊祖子久美

発行:a bullet.
[http://homepage2.nifty.com/cafetap/
plastick.dog@gmail.com](http://homepage2.nifty.com/cafetap/plastick.dog@gmail.com)

伊祖子久美さまのブログ
「雑音集積所」
[http://iso5kumi.blog.fc2.com/
cantarella17@excite.co.jp](http://iso5kumi.blog.fc2.com/cantarella17@excite.co.jp)

印刷会社:株式会社ポプルス